

学校評価を効果的に進めるための教員研修の在り方

- 高等学校 学校評価研修講座の取組から -

高校教育研修課 指導主事 速水 多佳子

はじめに

現在、兵庫県下の高等学校の学校自己評価の実施率は100%である¹⁾。しかし、学校評価の取組の中には、教職員や保護者、児童生徒を対象にアンケート調査を実施し、その集計を評価結果としている場合もあり²⁾、学校評価が定着しつつあるが、学校評価が評価のための評価になっている学校が少なくない現状がある。

国においては、学校評価の一層の充実を図るため、平成19年6月に学校教育法、同年10月に学校教育法施行規則がそれぞれ一部改正された。学校教育法第42条では、「小学校は、文部科学大臣の定めるところにより当該小学校の教育活動その他の学校運営の状況について評価を行い、その結果に基づき学校運営の改善を図るため必要な措置を講ずることにより、その教育水準の向上に努めなければならない。(高等学校にも準用)」と規定された。また、学校教育法施行規則第66条では、「小学校は、当該小学校の教育活動その他の学校運営の状況について、自ら評価を行い、その結果を公表するものとする。2 前項の評価を行うに当たっては、小学校は、その実情に応じ、適切な項目を設定して行うものとする。」(高等学校にも準用) 第67条では、「小学校は前条第1項の規定による評価の結果を踏まえた当該小学校の児童の保護者その他の当該小学校の関係者(当該小学校の職員を除く。)による評価を行い、その結果を公表するよう努めるものとする。」(高等学校にも準用) 第68条では、「小学校は、第66条第1項の規定による評価の結果及び前条の規定により評価を行った場合はその結果を、当該小学校の設置者に報告するものとする。」(高等学校にも準用)と規定され、学校の自己評価、学校関係者評価の実施、評価結果の公表及び評価結果の設置者への報告に関する規定が新たに整えられた。特に本県では、保護者や地域の方々の協力を得ることが必要となる学校関係者評価について、本年度から新たに実施することとなった。そのため、各校では学校関係者評価委員会を年に数回実施することとなり、その進め方等を模索しているところである。

本稿では、「高等学校 学校評価研修講座」の取組をもとに、その成果と課題を整理して、学校関係者評価委員会の進め方等も含めた、学校評価を効果的に進めるための、研修講座の在り方について提案する。

1 学校評価

(1) 学校評価を行う意義

教職員が生徒を「評価する」ことは、学校の教育活動の中で日常的に行われており、あらゆる教育活動の中で、評価を行う場があり、教職員は生徒を評価することに慣れている。しかし、反対に「評価されること」や、自分自身を「評価する」ことは今まで機会がなく慣れておらず、学校評価そのものに抵抗を感じる教職員も少なくない。また、学校評価のためにアンケート調査を実施し、その後の集計をする労力から、学校評価をマイナスイメージで捉えている教職員もいる。今までは実施されていなかった学校評価が教育現場に取り入れられることになり、負担感が大きくなっていることも事実である。そこで、まず、なぜ学校評価を実施する必要があるのか、なぜ教育現場に取り入れられることになったのか、「学校評価を行う意義」について整理する。

文部科学省から平成20年1月に出された『学校評価ガイドライン[改訂]』には、「学校評価は、以下の3つを目的として実施するものであり、これにより児童生徒がより良い教育活動等を享受できるよう学校運営の改善と発展を目指すための取組と整理する。」と示されている³⁾。

各学校が、自らの教育活動その他の学校運営について、目指すべき目標を設定し、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価することにより、学校として組織的・継続的な改善を図ること。

各学校が、自己評価及び保護者など学校関係者等による評価の実施とその結果の公表・説明により、適切に説明責任を果たすとともに、保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること。

各学校の設置者等が、学校評価の結果に応じて、学校に対する支援や条件整備等の改善措置を講じることにより、一定水準の教育の質を保証し、その向上を図ること。

また、善野八千子は、学校評価の意義と目的について、「学校評価を実施すること、それ自体が、目的ではありません。学校教育目標がどの程度達成され、教育活動がどのように有効に行われたかを見直すことです。全体としてどのような成果をあげており、どこに問題があるかを評価し、今後の課題を明確にすることができる客観的根拠が、学校評価であるといえます。」と述べており、学校評価を実施していく上での具体的な目的としては4点あげている⁴⁾。

学校評価を継続して実施することを通して、全教職員の共通理解が深まります。そのことによって、学校教育目標の達成を目指した学校組織と教育活動の活性化ができるのです。

学校自らが自校の教育を点検する姿勢を明らかにすることによって、保護者や地域住民に理解、支持され、開かれた学校づくりを進めることができます。

学校評価活動を積み重ねるとともに、学校が積極的に家庭や地域社会に情報を提供することによって、家庭・地域社会と一体となった、学校教育の在り方や家庭・地域社会の役割について話し合うための場づくりを目指すこととなります。

学校教育の改善のための課題を明らかにすることによって、教育行政の課題を明らかにすることとなります。

以上のように、学校評価は、アンケート調査を実施して集計をし、分析をすることが目的ではなく、分析結果を次年度に生かして学校をより良い方向に改善していくことが目的である。このように学校評価を実施することは学校をより良くしていくためのものであり、結果を次年度に生かしていくという学校評価の本来の目的が教職員に周知徹底されていないために、学校評価へのマイナスイメージが先走ってしまうのである。また、年度末の多忙な時期にアンケート調査を行って、集計や分析をするために教職員の煩わしさが増し、そしてさらに、次年度への改善まで考えている時間的余裕もなく、教員の異動の時期とも重なり、単なる集計のみで終わってしまっているという現状がある。

(2) 学校評価の種類

学校評価の種類について、文部科学省の『学校評価ガイドライン [改訂]』は、実施手法を次の3つに整理している。

ア 自己評価

自己評価は、「各学校の教職員が自ら行う評価」である。「自己評価は、学校評価の最も基本となるものであり、校長のリーダーシップの下で、当該学校の全教職員が参加し、設定した目標や具体的計画等に照らして、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価を行うものである。」また、「自己評価を行う上で、児童生徒や保護者、地域住民を対象とするアンケートによる評価や、保護者等との懇談会を通じて、授業の理解度や保護者・児童生徒がどのような意見や要望を持っているかを把握することが重要である。」と述べられている⁵⁾。

イ 学校関係者評価

学校関係者評価は、「保護者、地域住民等の学校関係者などにより構成された評価委員会等が、自己評価の結果について評価することを基本として行う評価」である。「学校関係者評価は、保護者、学校評議員、地域住民、青少年健全育成関係団体の関係者、接続する学校（小学校に接続する中学校など）の教職員その他の学校関係者などにより構成された委員会等が、その学校の教育活動の観察や意見交換会等を通じて、自己評価の結果について評価することを基本として行うものである。」また、「教職員による自己評価と保護者等による学校関係者評価は、学校運営の改善を図る上で不可欠ものとして、有機的・一体的に位置付けるべきものである。」と示されている⁶⁾。

ウ 第三者評価

第三者評価は、「学校と直接関係を有しない専門家等による客観的な評価」である。「第三者評価は、その学校に直接かわりをもたない専門家等が、自己評価及び学校関係者評価の結果等も資料として活用しつつ、教育活動その他の学校運営全般について、専門的・客観的（第三者的）立場から評価を行うものである。」と示され⁷⁾、保護者や地域住民など学校と密接な関係を有する者による「学校関係者評価」と、学校と直接関係を有しない専門家等による「第三者評価」の2つに、概念上分けて整理している。

(3) 本県の学校評価の取組

本県では、平成16年3月に学校評価システム検討委員会（委員長：加治佐哲也兵庫教育大学教授）の検討を受け、学校評価ハンドブック作成部会の成果を『学校評価ハンドブック』として発行し、学校評価システムを構築する上での指針とした。この『学校評価ハンドブック』では、学校評価システムは、各学校の様々な取組について、目標・計画（PLAN）、実践（DO）、自己評価（CHECK1）、自己評価の結果の公表と意見の聴取（CHECK2）、次年度への反映（ACTION）という一連の活動を通じて、各学校における教育活動を適切に評価しようとするものであると示している⁸⁾。このシステムを活用し、自己評価の結果を保護者や地域住民に公表し、意見を求めるなど、説明責任を果たしていくことによって、開かれた学校づくりを一層推進するように求めた。その後、平成19年の学校教育法、学校教育法施行規則の一部改正を受け、また、平成18、19年度に実施した文部科学省の委託事業「学校評価システム構築事業」の事業成果を踏まえ、学校の自己評価に関して『学校評価ハンドブック』の記述を一部見直すこととなった。そして、学校関係者評価の実施についての参考事項や留意点を示す『学校評価ハンドブック [追補版]』を平成20年3月に作成した。

学校関係者評価に関しては、学校関係者評価委員用に「学校関係者評価をすすめるために」というリーフレットを作成し、学校関係者評価の進め方や研究協議のポイント、その後の報告書のイメージや学校評価の標準的な年間スケジュールを示し、保護者や地域の方々の協力を得て学校関係者評価を実施し、学校評価の取組を一層充実し、実施することを推進している⁹⁾。

また、本県では、すべての県立学校に対して、学校自己評価の結果及び学校関係者評価を行った場合は、その結果及び評価結果を踏まえた今後の改善方策について、平成20年度末に報告をするように、通知を出している¹⁰⁾。国では学校関係者評価の実施について、努力義務としているが、本県では平成20年度末までに、学校関係者評価の実施、結果の公表がすべて達成されるように、はたらきかけており、学校評価の確実な実施に向けて取り組んでいる。

2 高等学校 学校評価研修講座の概要

(1) 研修のねらい

「高等学校 学校評価研修講座」は、7月8日（火）～9日（水）に1泊2日で実施した。講義・演習をとおして、自校の評価結果から課題を明確にして、その課題を解決し、教育活動の充実・改善に生かすための実践力向上を図ることを目的とした。具体的なねらいとしては、学校評価に関する基礎的な理論や手法が習得できます。

評価結果の公表についての考え方と方法が習得できます。学校評価を生かして教育活動を充実・改善する方法が習得できます。の3点をあげた。

本年度は、各学校で新たに学校関係者評価を実施することが求められ、さらに前述のように、平成20年度末には学校関係者評価の結果を報告するとともに、その結果を公表することとされている。保護者や地域の人々などが参加する学校関係者評価委員会は、学校の自己評価の結果を評価して、客観性や透明性を高め、意見を聴取して学校の教育活動などの充実・改善に生かす絶好の機会である。しかし、本年度からの導入ということもあり、各学校では学校関係者評価委員会のメンバーの選定をどうするか、どのような形で、1年間にどの時期に何回の委員会を開催するのか等苦慮しているところである。そのため、学校関係者評価委員会の運営方法の習得もねらいに含めて講座を計画した。

(2) 本講座の受講者

受講者は20名で、年代は20代から50代と幅広く、女性は1名のみであった。勤務校において、学校評価を中

心となって取り組んでいる受講者もいれば、学校自己評価のためのアンケートには記入して協力し、学校評価に参加はしているが、ほとんど学校評価に関する基礎知識がないという受講者も含まれていた。

(3) 研修内容

1泊2日の講座の内容を表1に示す。

表1 学校評価研修講座日程表

最初に、奈良文化女子短期大学の善野八千子教授による講義・演習「教育活動の充実・改善をめざした学校評価」において、学校評価の意義やねらいについて、信頼される学校づくりという視点から話していただいた。学校評価を実施することは学校組織の改革につながり、教師や保護者の意識改革、教育活動の改善につながることを実例をあげながら講義された。「学校現場の元気配達人」として活動されている善野教授が、生き生きと学校評価の意義を話され、また特に、学校評価が評価のための評価であってはならない、学校評価は学校のプラスになるものであると強調され、受講者にとって、今までマイナスイメージでとらえて

1 日 目	講義・演習 教育活動の充実・改善をめざした学校評価 ・学校評価の意義 ・学校組織の活性化 ・評価結果の分析と公表
	協議 自校の学校評価 ・現状把握と課題の分析 ・評価シートの項目の点検
2 日 目	発表 学校評価の取組実践（高校教員2名の発表）
	演習・協議 自校の評価結果の分析と公表について ・模擬学校関係者評価委員会 ・充実・改善に向けた企画書の作成 ・学校自己評価、学校関係者評価の年間計画

いた学校評価への意識が大きく変わり、学校評価を実施する意義が十分に理解できる講義であった。

1日目の午後の協議「自校の学校評価」では、受講者が持参した勤務校の実施済みの評価シートと昨年度の学校評価のまとめをもとに、自校の学校評価の実施方法や現状について情報交換を行った。課題としてあげられたのは、「担当者の負担が非常に大きいこと」、「教員間の意識に差が見られること」、「評価項目が多すぎること」、また、根本的な課題として、「学校評価の結果が翌年に生かせていないこと」等があった。評価項目が多いことにより、集計に時間を要すること、またその項目を教頭あるいは一部の教員が作成しているため、「職員全体に共通認識ができていない」、「学校の教育目標やビジョンと連動していない」、「表現があいまいである」等もあげられた。受講者の勤務校の情報交換ができ、学校評価の課題を浮き彫りにすることができた。その後、各校の評価シートの見直しを行った。学校要覧から学校教育目標、今年度の重点目標を確認し、評価シートの項目が目標に即した具体的なものになっているかについて確認をした。評価シートの項目は精選する必要がある、項目を設定する過程で、教員が十分に共通理解を図り、学校の取組もうとする教育活動が具体的なものとして見えることが大切であること、また、評価項目は毎年更新、改善していく必要があることも確認した。

県教育委員会の『学校評価ハンドブック[追補版]』では、評価項目の設定について、「年度当初に設定する単年度の重点目標の達成に即した具体的かつ明確なものとし、教職員全員が意識的に取り組むことが可能な程度に精選し、網羅的になったり、専門的な内容になったりしないよう留意する。」とある¹¹⁾。また、「学校が抱える課題等を把握するために実施するチェックリスト的な点検や、法令上の基準を満たしているかどうかなど法規に照らしたチェックを行うことは、学校経営上重要なことである。しかし、学校が目標を設定し、重点的に取り組む教育活動その他の学校運営上の状況について評価を行う学校評価においては、それらのチェック項目を網羅的に逐一取り上げて取り組むことは適当でない。」と書かれている¹²⁾。

2日目は、2人の高校教員から学校評価の取組について、「評価結果を教育活動の充実・改善に生かす」のテーマで実践発表を聞いた。分析方法や結果の公表の仕方等、参考になる点が多く、学校評価の主担当者として苦労した点や、困った点などについても具体的に話を聞くことができ、受講者にとって参考になる点や共感する点が多数あった。その後の演習・協議では、「模擬学校関係者評価委員会」と題し、ロールプレイングを行い、実際の委員会はどのような形で運営するか、学校としてどのような準備をすれば効果的に運営できるか等について考えた。

研修の最後は、これまでのまとめとして、勤務校の学校評価の課題とその改善策をまとめ、その後、自己評価、

学校関係者評価を効果的に実施するための年間計画を作成し、互いに発表して内容を確認した。これまでに勤務校の学校評価の課題が明らかになってきたためか、スムーズに改善策ができあがり、年間計画を作成することにより、学校自己評価と学校関係者評価を効果的に進めるためには、昨年度よりもアンケート調査や集計を早め実施しなければならないこと等が明らかになった。

(4) 模擬学校関係者評価委員会

「1(3)本県の学校評価の取組」でも述べたように、県教育委員会は、今年度から各学校で「学校関係者評価委員会」を立ち上げ、学校関係者評価を実施するよう推進している。そこで研修では、「模擬学校関係者評価委員会」と称し、グループでロールプレイングを行い、実際の委員会はどうのような形で運営をするか、学校としてどのような準備をすれば効果的か等を考えた。この実践は、すでに月刊『兵庫教育』で報告している¹³⁾。

このロールプレイングは、6人から7人を1グループとし、その中から1つの学校を選び、学校側と委員側に分かれて役割を決めた。県教育委員会の『学校評価ハンドブック[追補版]』では、学校関係者評価の実施のポイントの中で、「学校関係者評価委員

表2 A高等学校 模擬学校関係者評価委員会 記録

会は5人から8人程度で構成するのが適当と考えられる」と記載されている¹⁴⁾。研修では、学校側としての役割は、校長、教頭、学校評価担当者等とし、委員側としては保護者、学校評議員、卒業生、近隣の中学校教諭、元校長、自治会長等を例としてあげ、グループごとに自由に役割を決めた。ロールプレイングを行う前に10分間の時間を作戦タイムとしてとり、学校側はどのような形で説明を行うか、委員側はどのようなところをポイントに質問をするかを考えた。ロールプレイングの時間は全体で25分間とし、司会は教頭役がすること、最初に自己紹介をし、その後に学校側から担当者が資料を用いて、学校評価の結果とまとめを説明すること、そして、委員側から質問や意見を受けることとし、役割になりきって演じていただくことを約束として行った。あるグループの様子を表2に示す。

ロールプレイング後に、グループで学校関係者評価委員会を効果的に進めるためには、どのようなことをすると次年度の改善に向けた意義のある委員会になる

発言者	発言内容
司会者	概要説明 第1回の学校関係者評価委員会を始めます。 本年度実施予定の評価シートを配りました。この内容について担当者から説明し、その後疑問点等をお聞きします。
担当者	学校評価の概要説明 ・評価シートの説明 ・課題の説明
司会者	具体的な質問、疑問点があれば、出してください。 学校改善のために、よろしくお願いします。
卒業生	生徒指導について 生徒指導に関する項目の評価が低いのは、先生によって指導方針が異なっているからではないか。自分が在校生の時も感じたがやはり今も同じなのではないかと思う。実践目標を明確にしないと、同じことの繰り返しになってしまう。
担当者	生徒指導の基本的方針は変わらない。学年により指導に差があるのかもしれない。実践目標はもっとわかりやすい文言にする。
卒業生	先生によって言うことが違うのは、生徒の反発をかうことになる。共通理解を図るために、例えば6月までにとか早めに日にちを区切って研修会を開くなどしてほしい。
司会者	ルールの確認を早めにしてほしいということですね。他に生徒指導関係のことはありますか？
商店街店主	マナー指導について マナーはしっかりしているとの説明だが、あいさつをしない生徒がいる。あいさつの励行は社会人としての第一歩ではないか。朝、道いっぱい広がって歩き、迷惑である。また、夜遅くに部活動を終えて女子生徒が帰宅している姿に不安を覚える。
担当者	あいさつは基本的なことです。繰り返しの指導が必要です。朝の校門指導はできるだけ多くの先生が立つようにしている。最近では声が大きくなったかと思うのだが。根気強く指導していく。部活動後は早く帰る指導をしていく。
司会者	基本的な生活習慣、交通安全、マナーの項目の表現をもっと具体的にしていきます。 確かに、下校指導は、徹底できていない部分があります。
商店街店主	あいさつは社会人として基本的だということを入れてほしい。 夜遅く女子生徒が帰る、ということは危機管理と関係があるのではないか。
司会者	危機管理の項目のところと含めて考えてみます。
中学校教員	生徒の成長について 送り出した生徒が、3年間でどう成長するのかに関心がある。学年目標として、1年基礎学力の充実、2年学力充実、3年学力の向上となっており、この並びはよくわかるが、具体的にどういう目標を持って、達成度を目指しているのかを話してほしい。
担当者	1年生では、数学や英語を中心に、中学校の復習から始め、2年生では1年生の基礎の上に立ち、積み上げて、3年生では進路を考えていく。成績は入学時より、学力が向上したということもあるが、学ぶ意欲が強くなっていると感じる。

かを話し合った。学校側の立場としては、「学校の教育活動をしっかりと把握して説明できるようにしなければならない」、「自己評価をしっかりと分析して改善案を考えておく必要がある」、「細かい数値まで分析が必要である」、「質問を事前に想定しておかないと苦しい言い訳ばかりになってしまう」、「特に評価の低いものに対しての改善策をしっかりと考えておく必要がある」等の意見が出た。また、委員側としては、「配布資料の中に、学校目標を明示しておいてほしい」、「日頃から学校の様子を見ておかないと何も意見が言えない」、「短い文言で真意を伝えるのは難しいので言葉の選び方が重要である」等があった。全体をとおしての意見として、「学校側も委員側も学校や地域のことをよく知っておかないと発言ができず、委員会の意味がない」、「委員の方には学校の教育活動の一部分だけを見てもらうのではなく、日頃から学校に足を運んでもらい学校全体を見てもらわないと適切な評価がもらえない」、「資料は図やグラフを用いてわかりやすく作り、事前に配布しておいた方がよい」、「学校特有の用語を使っているのでわかりづらく真意が伝わりにくい」等があった。

最初、ロールプレイングに抵抗を感じていた受講者もいたが、実際に始まって以後は自分の役割になりきり、熱心な会議風景が繰り広げられ、時間が足りない様子であった。まとめとして、学校関係者評価は、学校自己評価の客観性・透明性を高めるために実施するものであり、学校自己評価の結果が適切かどうか、学校自己評価の結果を踏まえた今後の改善方策が適切かどうかを検討することが目的であることを再度確認した。

受講アンケート（一般研修研修講座）

講座番号	6361	講座名	高等学校 学校評価研修講座
受講番号		勤務校	
氏名		年齢	20代・30代・40代・50代

- 1 あなたが、この講座を受講するきっかけとなったのは何ですか。該当記号を1つ○で囲んでください。
 a 募集のしおり b 案内チラシ（一般研修講座のご案内） c 研修所Webページ
 d 同僚等の紹介 e 管理職の紹介 f その他（ ）
- 2 今回の研修講座内容の評価についてお聞きします。下記の各項目について該当番号を○で囲んでください。また、御意見等がありましたらお書きください。

(5: 非常によい, 4: よい, 3: 普通, 2: あまりよくない, 1: よくない)

項目	評価・意見					御意見等 (よかった点やよくなかった点等を簡単に)
	5	4	3	2	1	
研修内容 講義・演習 教育活動の充実・改善をめざした学校評価	5	4	3	2	1	
協議 自校の学校評価	5	4	3	2	1	
発表 学校評価の取組	5	4	3	2	1	
演習・協議 自校の評価結果の分析と公表について	5	4	3	2	1	

- 3 (1)～(4)の評価について該当番号を○で囲んでください。また、(5)、(6)にお書きください。

(1) 今回、新しい情報・知識・技能の習得ができましたか。 (5: よくできた, 4: できた, 3: 普通, 2: あまりできなかった, 1: できなかった)	5	4	3	2	1
(2) 今回の研修は教育活動・教育実践に役立つと思いますか。 (5: 非常に役立つ, 4: 役立つ, 3: 普通, 2: あまり役立たない, 1: 役立たない)	5	4	3	2	1
(3) 今回の講座運営はどうでしたか。 (5: 非常によい, 4: よい, 3: 普通, 2: あまりよくない, 1: よくない)	5	4	3	2	1
(4) 今回の講座の総合評価はどうでしたか。 (5: 非常によい, 4: よい, 3: 普通, 2: あまりよくない, 1: よくない)	5	4	3	2	1
(5) 今回の研修全体について、御意見等がありましたらお書きください。					
(6) その他、当研修所にどのような講座及び研修内容があればいいと思いますか。具体的にお書きください。					

- 4 施設や食事について、御意見等がありましたらお書きください。

項目	御意見等
(1) 研修施設について（空調・黒板等）	
(2) 宿泊施設について（宿泊室・風呂等）	
(3) 食事について（メニュー・味・量等）	

(なお、本アンケートは、来年度の研修講座の企画及び当教育研修所の運営改善のために行うもので、その他の目的には使用しません) 御協力ありがとうございます

図1 受講アンケート

3 研修の成果と課題

(1) 受講アンケートの実施

ア 目的

研修の内容が、受講者のニーズに合ったものであったか、また、今後の研修の運営改善のために、研修内容について評価と意見をアンケート調査した。

イ 方法

講座終了後にアンケート用紙を配布し、各研修内容について、5段階で評価をするとともに、意見を自由記述で求めるアンケート調査を行った。回収率は100%である。図1は、受講アンケートである。

ウ 結果と考察

善野教授の講義は、学校評価の意義やねらいについて、わかりやすく講義していただき、好評を得た。1日目の勤務校の情報交換と評価シートの項目の点検を行った協議「自校の学校評価」は、受講者による評価の平均が5段階で4.2、2日目の高校教員による実践発表が4.3、その後の模擬学校関係者評価委員会を行った演習・協議が4.3と、どの数値も高く、受講者の満足している様子が見える。善野教授の講義に対しては、「学校評価の意義や目的等がよくわかった」

「学校評価をプラス思考で考える点が印象に残った」、「信頼される学校づくりのために学校評価を行う意味合いは大きいと思った」、「学校評価が学校経営の軸になるものであるということがよく理解できた」等の意見があった。その後の協議については、「情報交換ができてよかった」、「他校の評価シートを見ることができて参考になった」、「勤務校の学校評価を見直すことができた」、「評価項目の精選をして、学校の方向性をしっかりと見定めることの大切さを学んだ」との声があった。

2日目の高校教員による実践発表に対しては、「学校評価の分析方法やまとめ方が参考になった」、「学校評価の主担当としての言葉には重みがあった」、「苦労された点を聞き、自分の勤務校ではどのようにすればよいかを考えさせられた」、「集計や公表の方法などが参考になった」とあった。やはり受講者と同じ高校教員の立場から生の声を聞くことができ、また、よい面ばかりではなく、失敗した例や同僚の教員の協力が得られず苦慮している学校の内情の話なども聞くことができ、大いに共感すると共に、刺激を受けることもできたようである。その後の演習・協議については、「ロールプレイングの演習は大変勉強になった」、「予想外に面白かった」、「問題点や課題が浮き彫りになった」、「評価結果の分析が重要で、時間を要することがわかったが、それが学校を変えるための力になるという確信も持てた」、「学校評価は学校をより良くするために行うものという共通認識を図りたいと思った」等があった。模擬学校関係者評価委員会は好評で、受講者がどこまで役割になりきることができるか、ロールプレイングが円滑に進められるかを心配していたが、この心配は杞憂に終わった。受講者が趣旨を理解した上で、受講者同士の協力があり、効果的に進めることができ、実際にロールプレイングをすることで、より多くのものを得ることができた。

講座の流れとして、最初に講義で学校評価の意義や目的をしっかりと押さえ、その後に協議や演習で情報交換を行い、勤務校の状況を振り返り、そして最後に改善策を探るとというのが効果的である。

1泊2日の研修という特性を生かして、受講者同士の交流が生まれる2日目にロールプレイングのような動きのある内容を入れると、意見も活発に出て、有意義な協議が可能となることがわかった。

(2) 研修講座に関するアンケート（事前・事後）より

ア 目的

研修事業評価システムの一環として、研修の前後にアンケート調査を実施した。研修講座のねらいに即した研修が行われたかどうかを検証し、研修講座をより充実させることを目的としており、受講者の理解度や習熟度の変容に焦点化した内容である。

講座名	6361 高等学校 学校評価研修講座	講座実施日	7月8日(火)～7月9日(水)		
受講番号	勤務校	氏名			

このアンケートは、当所の研修講座をより充実させることを目的として実施しており、皆様の個人的な評価を目的とするものではありません。また、回答を目的以外に使用することは一切ありませんので協力をお願いします。

* 以下の内容について、右欄の該当する数字を○で囲んでください。
 4：よくあてはまる 3：だいたいあてはまる
 2：あまりあてはまらない 1：まったくあてはまらない

内 容	回答欄			
	4	3	2	1
1 学校関係者評価も含めた学校評価に関して基礎的な理論を理解している	4	3	2	1
2 学校評価を実践する手法を理解している	4	3	2	1
3 評価結果の公表についての考え方を理解している	4	3	2	1
4 評価結果の公表についての方法を理解している	4	3	2	1
5 学校評価を生かして教育活動を充実・改善する方法を理解している	4	3	2	1

H20「高等学校 学校評価研修講座」の「ねらい」(H20「受講者募集のしおり」より)
 (1) 学校評価に関する基礎的な理論や手法が習得できます。
 (2) 評価結果の公表についての考え方や方法が習得できます。
 (3) 学校評価を生かして教育活動を充実・改善する方法が習得できます。

図2 研修講座に関するアンケート（事前）

イ 方法

講座受講前と講座受講後に図2、図3のアンケート調査を実施した。回収率は100%である。受講者の意識や理解度の変化を5つの項目について、4段階で(4:よくあてはまる、3:だいたいあてはまる、2:あまりあてはまらない、1:まったくあてはまらない)調査した。

ウ 結果と考察

図4は、調査結果をまとめたものである。5項目のすべてにおいて、講座受講後は理解が深まっている。事後アンケートの数値が3.1と最も低かったのは、評価結果の公表についての方法が理解できたか、の項目である。公表については、講義や実践発表の中では触れたが、協議や演習では取り上げなかった。受講者自身が主体的に参加する場がないと、理解が深まらなと感じるのであろう。来年度は、受講者が主体的に取り組むことができるような内容に改善したい。このアンケート結果から、前述のこの講座のねらいとした3点については、程度の差はあるが、事前よりも事後の数値がすべて高くなっており、ねらいに沿った講座内容であったと判断できる。

講座名	6361 高等学校 学校評価研修講座	講座実施日	7月8日(火)～7月9日(水)
受講番号	勤務校	氏名	

このアンケートは、当所の研修講座をより充実させることを目的として実施しており、皆様の個人的な評価を目的とするものではありません。また、回答を目的以外に使用することは一切ありませんので協力をお願いします。

* 以下の内容について、右欄の該当する数字を○で囲んでください。
 4:よくあてはまる 3:だいたいあてはまる
 2:あまりあてはまらない 1:まったくあてはまらない

内 容	回答欄			
	4	3	2	1
1 学校関係者評価も含めた学校評価に関する基礎的な理論が理解できた	4	3	2	1
2 学校評価を実践する手法が理解できた	4	3	2	1
3 評価結果の公表についての考え方が理解できた	4	3	2	1
4 評価結果の公表についての方法が理解できた	4	3	2	1
5 学校評価を生かして教育活動を充実・改善する方法が理解できた	4	3	2	1
6 この研修のねらいや内容は、期待どおりのものだった	4	3	2	1

H20「高等学校 学校評価研修講座」の「ねらい」(H20「受講者募集のしおり」より)

- (1) 学校評価に関する基礎的な理論や手法が習得できます。
- (2) 評価結果の公表についての考え方や方法が習得できます。
- (3) 学校評価を生かして教育活動を充実・改善する方法が習得できます。

図3 研修講座に関するアンケート(事後)

(3) 追跡調査より

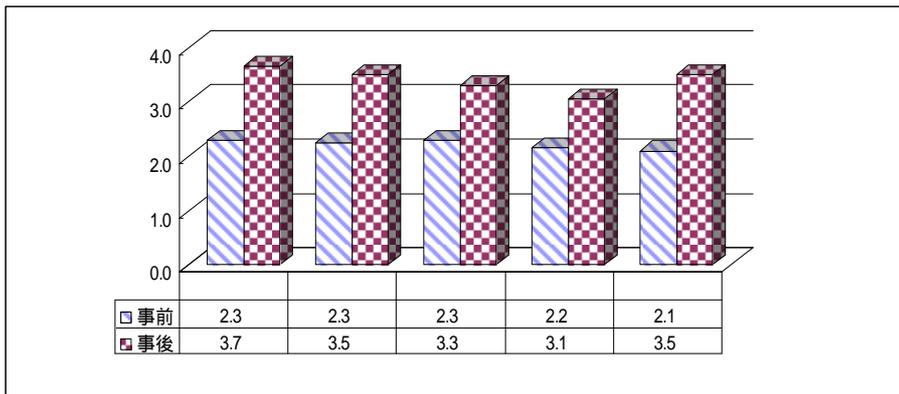
ア 目的

研修事業評価システムの一環として、研修講座終了後に、受講者が勤務校でどのように研修内容を生かしているか、研修内容を広めていくためにはどのような研修講座をすればよいのか、講座をより充実させることを目的として、追跡調査を行った。

イ 方法

研修講座を終えた約3ヶ月後にアンケート用紙を郵送し、FAXで回答を求めた。回収率は80%である。

アンケート用紙を図5に示す。



事前	学校評価に関して基礎的な理論を理解している	学校評価を実践する手法を理解している	評価結果の公表についての考え方を理解している	評価結果の公表についての方法を理解している	学校評価を生かして教育活動を充実・改善する方法を理解している
事後	学校評価に関して基礎的な理論が理解できた	学校評価を実践する手法が理解できた	評価結果の公表についての考え方が理解できた	評価結果の公表についての方法が理解できた	学校評価を生かして教育活動を充実・改善する方法が理解できた

図4 事前・事後アンケート結果のまとめ

ウ 結果と考察

研修で学んだことを実践したかどうかを聞いた結果が図6である。すでに実践した、または実践する予定の受講者が約94%である。実践する予定がないとした受講者はなかった。具体的な内容としては、「校内の学校評価委員会の委員として研修内容を生かした」、「評価シートの改善、研修内容をもとに、今年度の学校評価を推進している」、「教員、生徒、保護者、学校関係者用の評価シートを作成した」、「評価項目を見直したシートをつくり、協議しているところである」等があげられた。

また、研修で学んだことを他の教員に伝えたかどうかについては、図7のような回答を得た。すでに伝えた受講者が73%であり、伝える予定がないとした受講者はなかった。全教員を対象とした内容では、「校内研修等で学校評価の学習会を開いた」、「研修会を計画中である」、「学校関係者評

先日は、当所の一般研修講座を受講いただきまして、ありがとうございました。下記のアンケートは、当所の研修講座をより充実させることを目的としたものであり、受講者の個人的な評価を目的とするものではありません。また、回答を目的以外に使用することはありませんので、ご協力をお願いします。

この研修で学んだことを実施しましたか。あてはまるものを1つ選び、記号を で 囲んでください。

- ア 実践した
- イ 実践する予定である
- ウ 機会があれば実践したい
- エ その他()

でア・イのいずれかを選んだ方にお聞きます。具体的にどのような場面で実践しましたか。また、どんな予定がありますか。

でア・イ・ウのいずれかを選んだ方にお聞きます。研修で学んだ以下の内容について、実践をする上で役に立ちましたか。あるいは役に立つと思いますか。右欄の該当する数字を で 囲んでください。

- 4:大変役に立った(立つと思う)
- 3:役に立った(立つと思う)
- 2:あまり役に立たなかった(立つとは思わない)
- 1:全く役に立たなかった(立つとは思わない)

内容	回答欄			
学校関係者評価も含めた学校評価についての基礎的な理論	4	3	2	1
学校評価を実践する手法	4	3	2	1
評価結果の公表についての考え方	4	3	2	1
評価結果の公表についての方法	4	3	2	1
学校評価を生かして教育活動を充実・善する方法	4	3	2	1

この研修で学んだことを他の教員に伝えましたか。あてはまるものを1つ選び、記号を で 囲んでください。

- ア 校内研修等で全員に伝えた
- イ 一部の教員に伝えた
- ウ 今後伝える予定である
- エ その他()

図5 平成20年度 研修講座に関するアンケート

価について職員会議で説明を行った」等があった。一部の教員に対しての伝え方では、「学校評価に関する委員会や将来ビジョン委員会等で、学校評価を実践する手法や評価結果の公表についての考え方や方法について説明して伝えた」、「校長、教頭に研修内容を報告し、組織づくりを検討している」等があった。多くの受講者が研修内容を持ち返って校内で何かの形で伝えて生かしている。内容では特に、今年度から実施の学校関係者評価の進め方についてや、評価シート項目の精選の方法が役立ったようである。

4 学校評価を効果的に進めるための教員研修の在り方

本講座は、受講者自身の知識や手法の習得をねらいとしているが、実際に受講者が勤務校へ学んだことを持ち帰り、実践しなければ意味はない。現在、学校評価のためのアンケート実施は定着しているが、多く

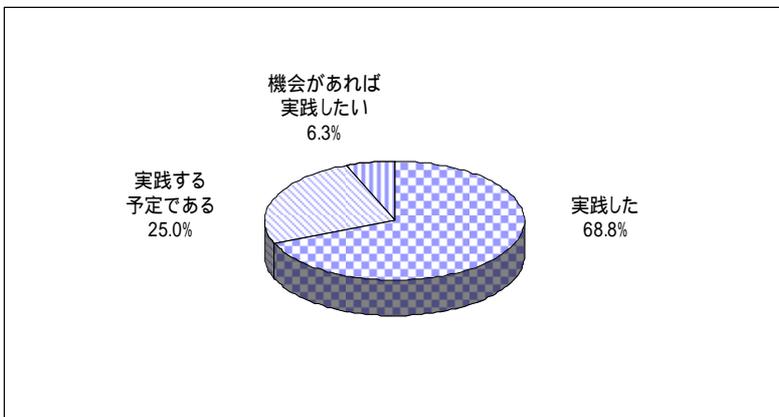


図6 研修で学んだことを実践しましたか

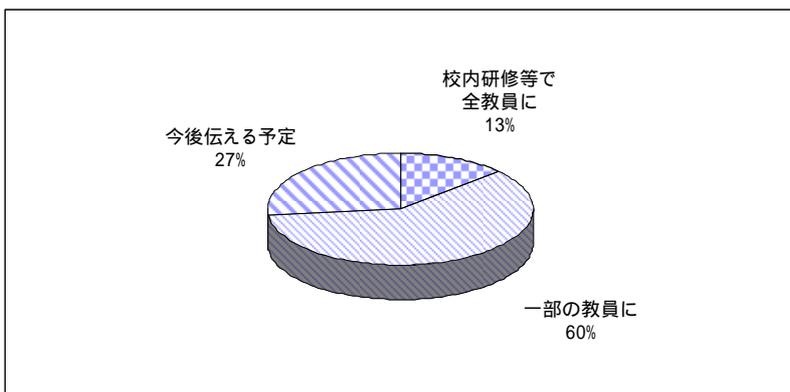


図7 研修内容を他の教員に伝えましたか

の学校で、その結果を次年度へ生かすことができていない。学校教育現場では、学校評価の意義がまだまだ理解されていないことがあげられる。学校評価が定着するには、まず、各教員が学校評価の意義や目的をきちんと知り、理解した上で、学校評価に取り組むことが必要である。そのためにも、受講者が、研修で学んだ学校評価の意義を学校へ持ち帰って正しく伝え、広めていく必要がある。学校評価を生かして教育活動を充実・改善することを、受講者自身が、今後学校で実践していくことを支援するような講座でなければならない。そのためには、どのような研修を行えば効果的であるか、次の3点を提案する。

学校評価の意義の理解

1点目の提案として、まず、研修において、学校評価に関する理論を学び、学校評価の意義を十分に理解することが重要である。学校評価が導入された経緯、学校評価の目的、そして、学校評価は、学校の教育目標がどれだけ達成されたのかを把握するため、その取組について評価し、改善が必要なところを改善していくという学校評価のPDCAサイクルによる一連の流れを理解することである。研修の導入部分に、大学教授等の専門家からの講義等により、学校評価の意義を理解することが必要である。

学校評価の理解のための実践発表

2点目の提案として、学校評価の意義を十分に理解する方法として、高校教員による実践発表を取り入れることである。学校評価の意義を受講者自身が十分に理解し、学校評価が教育活動の充実・改善につながることを実感するためには、実際の取組状況を聞くことが効果的である。受講者と同じ立場の高校教員から先進校の取組状況を聞くことにより、学校評価によって、どのように学校が変わるか、生徒がどのように変わっていくかを知り、学校評価が教育活動の充実・改善につながっていくことを具体的に知ることが望ましい。また、実際の取組状況を担当者から聞くことにより、表面的なプラス面ばかりでなく、担当者としての苦労した点や実施過程での克服した方法を聞くことができ、受講者にとって励みとなり、勤務校へ戻った後の取組の参考になる。

ロールプレイングの実施

3点目の提案は、研修の手法として効果的な、ロールプレイングを取り入れることの提案である。本年度は、学校関係者評価を新たに実施することになっており、どのような形で取り入れ、進めるかについての理解を深めるために、研修でロールプレイングを実施した。

県教育委員会の「学校関係者評価を進めるために」のリーフレットによると、「学校関係者評価は、学校自己評価の結果等について評価することによって、学校自己評価の客観性や透明性を高めること、学校・家庭・地域が学校の現状や課題について共通理解を持って、その連携協力により学校運営の改善に当たることをめざすものです。」また、「そのためには、学校関係者評価を、学校・家庭・地域を結ぶコミュニケーション・ツールとして活用し、学校が十分な情報提供や学校の公開を行うとともに、学校関係者評価委員が積極的に意見を述べるなど、主体的・能動的な評価活動が重要です。」と書かれており¹⁵⁾、学校関係者評価の果たす役割は大きい。1年間の学校評価の流れの中で、最も重要な部分であるといっても過言ではない。学校関係者評価委員会では、学校側が自己評価結果を踏まえた今後の改善方を示し、それが適切かどうかを学校関係者評価委員が判断するため、学校評価が効果的に機能しているかどうかを見極めることになる。また、学校側がどのような教育活動を行っているのか、どのような効果が見られるのか、説明責任を果たすという意味もある。そのような意味合いをもつ学校関係者評価委員会を効果的に進めるための研修方法として、ロールプレイングの実施が効果的であった。研修の形態としては、受講者自身が主体的に活動する場を設けた方が、効果的であることがアンケート結果より明らかである。

台利夫は、ロールプレイングについて、「日常のある課題場面の諸役割を、その場の参加者たちが言葉と行為で演じてみて、解決の手がかりを得る方法である。」と定義している¹⁶⁾。参加者が、自分と違う立場を演じることによって、擬似的に体験して、ある問題について考え、表現することで、意外な点に気づいて解決の手がかりをつかむことができる。

ロールプレイングの手順としては、まず、ウォーミングアップとして、参加者それぞれのやる気や自発性を引き出すことと、参加者の間に人間関係をつくることから始まる。ロールプレイングは、与えられた役割になりきって演じる必要があり、参加者全員が協力して参加しなければならない。初対面同士ではロールプレイングは効果的には進めにくい。ある程度、互いのことを知り、参加者同士の人間関係ができた上で実演の方が発展的な展開が期待できる。実演中のロールプレイがそのまま課題解決を示唆することもあるが、実演の終わった後のシェアリングで参加者一同で気付いたこと、感じたことを話し合っ理解を深めることができる。体験を分かち合い、話し合うことから新たな課題がうまれることもある。ロールプレイングでは、また、場面設定も重要である。物理的な側面の舞台も必要で、机や椅子等の配置も考慮することにより、仮想の場面がより現実に近いものとなり、演技をしやすくなる。ロールプレイングの効果として期待できるのは、観念的にとらえていたことが身体を動かして演じてみると、思っていたのとは違うという気づきを得ることができ、新たな発想を導き出すことである。また、本来の自分とは違う立場を演じることにより、相手の心情が理解でき、ロールプレイングをする前には見えていなかったものが見えてくる。ロールプレイングを円滑に進めるには、雰囲気作りも重要で、受講者同士の協力が必要である。そのためにも、研修は1泊2日での実施が効果的である。宿泊を伴うことで、受講者同士の交流を深めることができ、ロールプレイングを、より現実に近い形で実施することができる。また、受講者同士の交流が深まることにより、研修が終わり、勤務校に戻ってから互いに連絡を取り合い、相談相手となる場合もある。研修中の情報交換はもちろんであるが、研修時間外での交流によって、より関係が深まることもある。

本年度研修講座で実施した学校関係者評価委員会のロールプレイングは非常に好評であった。ロールプレイングを実施する意義は大きい。単なる委員会の進め方がわかるという技法の理解だけではない。ロールプレイングを実施することにより、自分とは違った立場の、学校関係者として委員会に参加する学校関係者評価委員の心情が理解でき、どのように委員会を運営すればよいかを理解することができた。講座で実施したロールプレイングでは、グループ内の受講者の中から1つの学校を選び、その学校の学校関係者委員会を想定して実施した。このロールプレイングを、実際の学校評価委員会を開く前に、校内で、校内の事情がわかっている同僚の教員の中で役割分担をして行くと、さらに活発な意見が出て、学校関係者委員会がより効果的に運営できると考えられる。勤務校へ持ち帰り、校内の教員で模擬学校関係者評価委員会を実施することを提案する。相手の立場を実感し、理解することにより、実際の委員会の流れが予測でき、準備を十分にすることができる。本年度から新しく取り入れる学校関係者評価委員会の在り方を研修するには、ロールプレイングを取り入れた研修を実施することが効果的であることを提案する。

おわりに

県教育委員会の『学校評価ハンドブック [追補版]』には「学校自己評価も学校関係者評価も、教職員、児童生徒、保護者、地域の方々など学校評価に関わる人々が達成感(やりがい)を感じながら、取り組むことができるものとするのが大切である。」と書かれている¹⁷⁾。学校評価の意義について、教職員はもちろん、保護者や生徒も十分に理解し、学校関係者評価委員会を効果的に進め、学校の教育活動の改善につなげていくことが望まれる。時間をかけて実施する学校評価である。効果的に行わなければならない。

また、学校評価は、学校の教育活動の改善が必要な点が浮き彫りにされるが、逆に、良かった点も明らかになる。福本みちよは、「学校の強み(=個性)を引き出す役割も有していることを忘れてはならない。学校の強みは学校の特色として更に強め、学校の弱みは弱みとしてきちんと理解し、それを強みに変えていけるように学校が『何を』『どのように』改善していけばよいか、その方向性を明らかにするために学校評価を行うのである。」と述べている¹⁸⁾。学校評価を学校の中でどのように位置づけ、どのようにとらえるのかを教職員全体で共通理解することが重要である。そうしなければ、評価のための評価に過ぎないことになる。

研修講座で実施した学校関係者評価委員会のロールプレイングは、校内研修でもすぐに取り入れて実施すること

が可能である。また、校内で実施すると校内の実態に基づいた意見が活発に出て、より実際の学校関係者評価委員会に近い形で実施されるのではないかと予想される。研修所で実施した、他校の教員とのロールプレイングとはまた異なる効果が期待できる。ぜひとも、学校関係者委員会のロールプレイングを、各校で校内研修に取り入れて実施し、実際の学校関係者評価委員会が効果的に運営されることを期待する。

注)

- 1) 兵庫県教育委員会「平成19年度学校評価の実施状況調査」, 2008.1
- 2) 兵庫県教育委員会『学校評価ハンドブック [追補版]』, 2008.3, p.11
- 3) 文部科学省『学校評価ガイドライン[改訂]』, 2008.1.31, p.1
- 4) 善野八千子著『学校評価を活かした学校改善の秘策』教育出版, 2004, pp.140-141
- 5) 文部科学省『学校評価ガイドライン[改訂]』, 2008.1.31, pp.2-3
- 6) 文部科学省 同, pp.2-3
- 7) 文部科学省 同, pp.2-3
- 8) 兵庫県教育委員会『学校評価ハンドブック』, 2004.3
- 9) 兵庫県教育委員会「学校関係者評価をすすめるために」, 2008
- 10) 教高第2966号「学校評価等の結果の報告について(通知)」, 2008.4.1
- 11) 兵庫県教育委員会『学校評価ハンドブック [追補版]』, 2008.3, p.6
- 12) 兵庫県教育委員会 同, p.6
- 13) 高校教育研修課 月刊『兵庫教育』兵庫県立教育研修所, 2008年10月号, pp.66-67
- 14) 兵庫県教育委員会『学校評価ハンドブック [追補版]』, 2008.3, p.13
- 15) 兵庫県教育委員会「学校関係者評価をすすめるために」, 2008
- 16) 台利夫著『ロールプレイング 新訂』日本文化科学社, 2003.2, p.8
- 17) 兵庫県教育委員会『学校評価ハンドブック [追補版]』, 2008.3, p.10
- 18) 福本みちよ「学校評価の課題と今後」『中等教育資料』, 2007年10月号, pp.18-21